



I N T E R V I E W

インタビュー

吉川隆一 新学長に聞く

地域に支えられ、 世界に挑戦する 大学をめざして



吉川 隆一 滋賀医科大学 学長

**さまざまなお機会を活用して
大学への理解と支援を地域に
広げる**

この四月に学長に就任されましたが、就任にあたっての抱負やご決意、また学生、教職員に望まれたことなどがありましたらお聞かせいただけますか。

就任に際して、学内LANですべての教職員と学生にメッセージを送りましたが、その中で「地域に支えられて、世界に挑戦する大学をめざす」という私のモットーを伝えました。

まず地域のみなさんに自分たちの大学として支えてやろうと思ってもらえるように努力する、そして地域に密着した運営によって足腰を強くした状態ではじめて世界に挑戦することができると思っています。さらに高度な研究や実績を、地域にフィードバックして地域からの信頼を増すようにすることが大切です。

そういう気持ちを変わらず持ち続けて、大学を運営していきたいと思っています。

地域に開かれた大学を実現するために、また県民の期待に応えるために、具体的にどのような取り組みを進めていかれるおつもりですか。

滋賀医科大学のサポーターを増やしていきたいと思っています。その一つ

に、「しゃくなげ会」という学生教育のために献体を申し出てくださった方々の会があります。会員は現在約1400名おられますが、この方たちはもともと強力なサポーターであると言えます。

これはまだ具体化していませんが、そのしゃくなげ会を基本的な支持母体として、会のリーダーや役員の方々と相談しながら、県内の各地域で会合を開いていただくようにして、そこへ大学からも出かけて行って、健康教室のような形でお話をさせていただこうと考えています。大学の現況などを報告させていただきながら、大学への理解と支援を地域に広げていきたいと思っています。

もう一つは、毎年七月に大学で公開講座を開いていますが、こちらの参加者の中から希望される方を集めて、附属病院の見学ツアーを実施したいと考えています。

これが好評ならば病院ガイドのような形で定期的開催して、どどん病院の中を市民のみなさんに見ていただくようにすることで、サポーターが新しく生まれてきたらと考えています。

知らなければ支持もできないと思いますので、県内に滋賀医大のことを知っている人を増やすために、さまざまなお機会を設けていきたいと思っています。

滋賀医科大学附属病院の位置づけ、これからの方向性についてはどのように考えておられますか。

大学病院ですから、一般の病院ではできない高度で、先端的な医療を施せないといけないわけです。先進的な医療を新しく作り出すことができる、今まで治らなかつた病気の治療ができるといった新しい技術を開拓していくことが大学病院の使命だと思います。

同時に、地域の医療機関が治療に難渋した時にいつでも受け入れられるように、病診連携をうまく築き上げて、その中で地域医療の要の役割を担うことが期待されていると思います。

滋賀県の診療ネットワークがうまく機能して、一人一人が最高最適の医療を受けられるようにするために、中心的な役割を果たすことが求められていると思います。

これからの大学は社会との連携ということが大切になってきますが、産官学連携についてどのような可能性が考えられますか。また、連携を推進するために大学・大学院では何か新しい取り組み・体制づくりが必要になりますか。

文部科学省の方針に沿って、大学としても産官学連携推進委員会を学内に作って、新しい種があれば県内の産業界にお知らせして、いい種であるかどうかをみなさんに評価してもらおうと考えています。

その中でもいくつかの方向性があると思います。一つはバイオテクノロジー

で、本学には医学、分子生物学、遺伝子などの専門家がおりますので、そういった技術を活かしてバイオ産業の育成に貢献していけると思います。

もう一つは、日本でここにしかないIVMRという医療機器と、周辺のノウハウを活用して、新しい医療産業を育成するというのも一つの方向性ではないかと思っています。

さらに、大学の看護学科には大学院もありますので、看護や介護の分野で、たとえば介護機器の開発などに産学協同で取り組んでいけると思います。今後非常に大切な分野ですので、ぜひ育てていきたいと考えています。

より高度な研究・教育の実現に向けて 講座・診療科の再編成に 取り組み

昨年の外部評価を受けて、第四回滋賀医大フォーラムでは、どのような提言や具体的な改革案が策定されたのですか。

一つは、学内の組織・機構をできるだけ柔軟性をもったものに変えていくということでした。

講座間の壁を取り除いて大講座にして、人の動きや配置が自由に行えるようにするために、講座・診療科の再編成を進めていきます。内部的にはできるだけ組織を変えて、時代の流れに対応できる機構・組織にしていこうという

ことで、たとえば現在の第一、第二、第三とある内科を一つにする、外科も一つにまとめようということになりました。

もう一つは、再編を通じて大学全体を活性化して、より高度な研究や教育ができる大学をめざすということです。全体が世界的レベルの研究をしているというわけにはいかなくて、どうしても凹凸があります。遅れている部分

をもちあげることも大切ですが、突出している分野をまず進めていって、他の部門も負けないようにがんばって追いついていくという形にするのが望ましいと思います。

そのために、世界レベルの研究をされているいくつかの部門に集まってもらって、集約できるような新しい大学院を作るといふ方針をたてて、文部科学省に交渉しています。高度化できることから高度化していく、そういう方針で進めていきたいと考えています。

「独立行政法人化」によって、滋賀医科大学にはどのような変革が求められているのですか？

「独立行政法人化」あるいは「エージェンシー化」と言われていますが、イギリスのサッチャー政権によって始められた、いわゆる行政機構の簡素化というものです。

昨今の財政赤字といふこともあって、国の行政機構全体に行われていくわけですから、われわれもそれを受け入れ

てやっていかないとけないわけですね。

一方、明治以来、国立大学が高等教育の育成と発展に大きな貢献をしてきた事実は、国の公的な資金が高等教育の充実や高度な研究に不可欠であるということも物語っています。公的資金が大学教育や研究に投資される額をGDP比で見ても、欧米諸国に比べて日本はまだ低いということです。

今の社会情勢などを考えると、できる限りの協力をしなければならぬと考えていますが、やはり法人化されても、今まで社会から求められてきた役割を果たしていくためには、ある程度の支援は必要だと思っています。これから果たしていくべき役割に関して、ぜひ市民のみなさんの協力をいただきたい、法人化された後もご支持をお願いしたいと思います。

たとえば民間の病院なら、不採算部門はやめてしまうことができますが、地域の基幹病院・教育病院としての役割を担う以上、不採算部門であっても存続していかねばならないということがあると思います。

滋賀医科大学と附属病院（手前）





もっともこれからは国立大学といえども、やっていることに一つ一つチェックを入れて、民間的な視点で無駄をなくし合理化を進めることが必要です。

このたび民間から公募した方に経営担当の副病院長に就任していただきました。財務状態をチェックして、必要な支出に対してはカットするという一方で、民間的な手法を取り入れて、経営効率を向上させるといふことをぜひやっていきたいと考えています。

大学病院として担わなければならないことの中には採算がとれない部分もかなりありますが、そこには公的な支援、社会の支援が必要です。

最近アカウンタピリティということばがよく使われますが、効率化できるところはとことんやって、不採算でもやめることができる部分については、市民のみなさんにきちんと説明して、不採算であっても必要だということを理解していただいたうえで運営していきたいと考えています。

優れた医療人を育成するために欠かせない 新しい知識・技術の創造

研究分野および診療部門で、今後どのような独自性を打ち出していければいいか。

先程もお話しましたように、高度化できることから取り組んでいきたいと思えます。

たとえば、生活習慣病をターゲットに、新しい研究グループを立ち上げてやっていこうというふうにはスタートしています。生活習慣病の研究では世界的な実績を誇る内科学、福祉保健医学、薬理学が一つにまとまることで、原因の解明や予防法・治療法などをテーマに、より高度な研究を展開していけると思えます。

また、MR医学についても、開発研究センターを立ち上げて、新しい技術や周辺機器の開発など、研究から治療まで、日本のMR医学のメッカとなるような成果を期待しています。

よりよい医療を実現するために、医療スタッフには高いレベルの能力と幅広い教養、豊かな人間性が期待されていますが、どのような教育理念あるいは目標をもって、医療人や研究者を育成していこうと考えておられますか。

私は医療人というのは、市民の目線を持っていること、一般的な常識を持っていることが大切だと考えています。高い倫理性や高度な専門性ということにとらわれ過ぎると、逆に視野が狭くなって、「私の言うことをききなさい」といった姿勢になりかねません。それが、今のいろいろな医療の問題の根になっているように思えます。

ですからむしろ、学生に特別なことを求めるのではなく、一般市民の目線で、自分が患者さんやその家族の立場になれば、どう考えるかを理解できる

ような、患者さんになるほどと納得してもらえようなことのできる医療人を育てたいと考えています。

研究者養成型の大学院大学をめざすのか、良い臨床医養成に重点を置くのかといったことが議論されますが、フォーラムでの改革案などをふまえて、これから大学としてめざす方向性について、お考えを聞かせていただけますか。

医科大学は医師や看護婦という職業人を養成する学校ですから、そういう意味では職業訓練学校のような面があるわけですが、大学であるかぎり新しいものを作り出すところでなくてはいけないと思います。

知識と技術を身につけた医療人の養成ということだけに終始していたら、知識や技術は枯渇してしまいます。知識や技術はどんどん進歩しますから、その知識や技術を生み出せるような先生が教えないと、ほんとうの教育にはなりません。新しい知識や技術を創成できるような教育機関でないと、良い医療人を育てることはできないと思います。

ただ、滋賀県の医療レベルを向上させるために、県内で働く医療人を養成するという滋賀医科大学の建学の趣旨から言いますと、これまでに2000人近い医師が巣立ち、そのおよそ半数は県内で活躍していますので、その役割は十分果たしていると思えます。今後もしそれは変わらないし、よりレベル

の高い医療人の養成をめざしていきたいと思えます。

しかし、それを続けていくためには、知識を再生産できる大学でないといけないので、二つの中からどちらかを選択するものではないと思っています。

県民の健康を守り、安心して暮らせる社会を実現していくために、滋賀医科大学の果たす役割は今後ますます大きくなると思えます。本日はどうもありがとうございました。

